
学園ドラゴン

仲河純夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園ドラゴン

【Nコード】

N7485Y

【作者名】

仲河純夜

【あらすじ】

皆さんは突然暗闇の世界で目覚めてしまったら何をするだろうか？
普通はやはり、ここはどこだと考え出ようとするだろうか？
だが、刈谷神時は違った、神時が考えた結論それは、
「オレはこのまま異世界に行くんだな！」であった。
刈谷神時は本当に異世界に飛ばされてしまうのだろうか？

序章（プロローグ）？

「……、は？」

朝日が眩しくて目覚めたはずなのに、そこには真っ暗な世界とオレが一人いるだけだった。

オレの感情で初めて湧いてきたのは…、こりゃあ、夢だな
そう思い自分の頬を思いっきり引っ張ってみた、結果、とっても痛かった。

いやいやいやいやいや、待て待て待て待て待て待てッ！！！！！！
よく考えるんだオレ！　こんなありえるわけないだろ。

冗談だよ、きつと！　学校の友達がこっそりオレを脅かそうとして、オレを闇に包んだ…に違いない…。

で、でも　普通こんなことできるわけないよな？

もしかして、漫画や小説みたいに異世界に飛ばされちゃったてへっ　展開か！？

あー、落ち着けオレ！

まず、オレの名前は、刈谷神時。　16歳、高校2年生。彼女なし……。

あだ名は、マルガリータ（過去）　現在はあだ名なし！
容姿は普通、勉強はそこそこできる。運動もそこそこできる。
いたって普通の高校生ー！　いや、待てよ…。

”これって、漫画や小説みたいな主人公設定ではありませんかーーー
ー！？”

なるほど、だからオレは異世界に飛ばされることになったのか！。
納得、納得。

そして今は、異世界に飛ばされてる途中というわけだな？

よし、もう少し寝るかー…………。

「起きてください！ あなたは私を傷物にした罪を償ってください！
さあ、早く起きてくださいっ！」

（あれ、おかしいな。なんかとんでもない事言われてるような気がする…）

（つーか、オレは今異世界に飛ばされてる途中で忙しーんだよ！）

「5秒前起きないと、私は、じ、自殺しますよ！ 5、4、3、2
…………、本当に自殺しますよ！？」

「はあ、いいよ別に…。オレは異世界に行くんだから君がどうなってもいいのー」

神時はどうでもよさそうに寝言を装って声の主に伝える。

「うううう……、ふえーん！」

すると、盛大に泣き出してしまった。

（まったくなんだってんだよ、いきなり、泣き出しやがって…。あれ、ちょっと待てよ）

（この空間にいるのはオレだけのはずなのに、なぜか他の人から言いがかりをつけられたってことは、オレはもう異世界についてたのか？）

（あー、なるほど。これは異世界に落ちてきて、美少女と遭遇して

仲良くなつて恋仲パターンだな！)

(しょうがない、目を覚ましてやるか)。そして、オレの新しい冒険が幕を開けるのだ！)

神時はゆつくりと瞼を開けると、寝てる神時に対してまたがつて座っている少女がいた。

とつてもファンタジーな衣装で、白と赤と青を基調にした甲冑みたいなものを着けており。

皆が気になる容姿はというと、雪原の狼を思わせるような白銀のロングヘアー、海底のように深くそれでいて海の輝きを忘れさせない青い瞳。

そして、大きいと言えない、しかし小さいとも言いがたい、形のととのった胸。

はつきり言おう、美少女であると！！

神時は、周りの景色より目の前の女の子に視線を釘付けにさせられてしまった。

すると、美少女は涙目のまま、につこり頬笑みこつ言つた。

「私の勇者様！ 今日から一緒にドラゴンを倒しましょうね！」

この出会いが、オレ。刈谷神時の人生を大きく変えることになつてしまうのであつた

序章（プロローグ）？（後書き）

まだまだ下手な文章かもしれませんが、皆さんが面白いと思われるようがんばりますのでどうぞよろしく願います。

序章（プロローグ）？

（今オレは美少女に馬乗り（またがられている）状態である）
（これはラブコメ展開なのか？）

そう思いながら神時は目の前の美少女から目をはなせないでいた。
少女はそんな神時に対して、ぐっと顔を寄せてきた。
そして至近距離のままにこつと頬笑み、こつ言った。

「どうしたのですか？ さあ、早くドラゴンを倒しに行きましょう
！」

神時はこれにおおー！っと言いそうになったがぐっと我慢し、異世界に来たら必ず言う言葉を少女に聞いた。

「ここはどこだ？」

少女の返答はこつだった。

「あへ？ ここはどこって何を言っているのですか勇者様。ここはあなたのお部屋ではないですか」

「え？」

神時はゆっくりと首を動かし周囲を見渡す。

無差別に積み重ねられた雑誌やCD 勉強机にノートパソコンが
一台 茶色いタンス

漫画や小説、参考書などが本棚に並べられ テレビの前にはゲー
ム機が一台置いてあり

天井は白 壁も同じく白 床のじゅうたんは青 カーテンも青
そして今オレが寝ているベット

こんなどこにでもありそうな部屋はただ一つ。

「ここ、オレの部屋じゃん…」

神時はゆっくり目をつぶった。

（よし、考えるんだオレ！ さっきの暗闇空間は夢、そしてオレに
またがっている少女は…）

神時はゆっくり目を開け、少女が目の前にいることを確認する。
そしてまた、目を閉じる。

（うん、目の前の少女は夢じゃない！ そしてここはオレの部屋！）
（つておい！ さっきまでの展開だと、異世界に飛ばされ仲間を集
め魔王を倒す！って感じだったじゃん！ 読者がいたら今の状況、
マジないわゝって感じだろ！）

（まったく、どのどいつだよ！ 夢は頬を引つ張って確かめろつ
て言ったの！ 痛くなかったら夢だなんて嘘じゃないか！ とつて
も痛かったのに夢だったぞ）

神時は目をつぶりながもんもんと心の中一人で語っていた。
すると、少女は頬をツンツンと突つついてきた。

「だ、大丈夫ですか？ 体の具合でも悪いんですか？」

神時は目を開け、少女の顔を見た。

涙を目に浮かべながら真剣に心配している様子だった。

「だ、大丈夫だ！ 問題ないぞ！」

ビックリした神時は苦笑いを浮かべながらなんとか少女に心配を
かけまいとする。

「そ、そうですか？ ならいいのですが…」

少女は少しほっとした表情を浮かべ、涙を指で拭き取った。

神時は苦笑いのまま、少女にお願いをした。

「重いつてわけじゃないんだけど、そのどいてくれるとありがたい」
「うわっ！ す、すみません。気付かなくて！」

（気付いていなかったのか…、まさかの天然か！？）

少女はすぐに神時の上からおり、ベットの端にちょこんと正座をする。

神時は体をゆっくり起こしあぐらをかいて、少女と向かい合う。
そして神時はこういふとき必ずかける言葉を口にする。

「えっと、君どこから来た？」

「世界の中立にある『アフエテリア』です！」

少女は元気よく返答に答えてくれた。

「カフェテリア？」

「アフエテリアですよっ！ 間違えないでくださいっ」

「ああ、ごめんごめん。じゃあそれはどのカフェテリアのお店だ？」

「だからカフェテリアじゃありませんっ！ ア・フェ・テ・リ・アです！ すべての世界の中立に位置する場所ですよ！」

「君頭のネジが飛んでいるのか？ それとも生まれたときかこうなっていたのか…」

「どこも飛んでませんよっ！ 勇者様ちゃんと理解してくださいっ」
少女は目を潤ませ、胸の辺りで手を握りながら神時に接近する。

（確かに、さっきまでの夢といい、その直後のこの子といい…。何か関係があるかもしれないな）

「わかった。アフエテリアと言うものがあるでしょう。それで、君はなぜそのアフエテリアから来たんだ？」

神時の質問に対し、少し暗くなる少女。

「実は、どじを踏んで追放されたんです…」

神時はこういう表情にどういにも弱く、少女の肩を掴んだ。

「大丈夫だ、きっとなんとかなる！」

根拠も何もないが、なんとかしてこの少女を励ましたいと神時は思った。

神時の励まし、少女は表情を明るくする。

「勇者様、私はあなたを選んでよかったです…」

少女はなぜかとろんと溶けたような表情をした。

そして、前向きな表情になり、

「それでは、一緒にドラゴンを討伐に行きましょう！」

と言い出した。

少女は意気揚々とベツトから降りようとしたとき、神時は少女の手を掴んだ。

そのことにビックリした少女。

「ひゃっ。ゆ、勇者様…？ ま、まさか…、本当に私を初めてを奪う気ですか…？ でも勇者様なら、べ、別にいいですよ？」

「いやいやいや、違うから！ オレはただドラゴンがこの世にいないってことを伝えようとしただけだから」

神時は慌てて少女の手を離し、今は違うことで手を掴んだと説明した。

少女は神時の言葉を聞きそのまま、床に力なく座った。

「う、うそ…。だって、レイラ様は…、この世界にドラゴンがいるって…。それを倒せばアフテリアに戻っていいって…」

少女は何かに絶望したような表情で呟いていた。

「いや、まあ。その…、ドラゴンってのは実在しない空想上の生物なんだ。この世界ではな」

「じゃ、じゃあ！ 私はどうすれば…」

「……………」

神時は黙ったまま、少女の表情を見た。とてもつらそうな顔をしていた。

（中二病的なことを言ってたはずなのに…、なんかこっちまでつらくなってきたな…）

「勇者様っ！ なぜ黙っているのですか!?!？」

少女は神時の両手を掴み、涙を浮かべながら神時のほうを見る。

「ま、まずは落ち着け、な？」

神時は少女の頭を撫でた。

（昔妹が泣いてたときこうやるとすぐ泣き止んだっけな。この美少女はどうだか知らないが、人に頭を撫でてもらってたぶん嫌なやつはいないだろ…）

少女は少しずつ、落ち着きを取り戻していった。

「あ、ありがとうございます……」

恥ずかしそうに上目遣いで神時を見る。

神時は落ち着いた少女を見て、頭の上から手をどける。少女はなぜか一瞬寂しそうな顔をした。

「大丈夫か？」

「は、はいっ。取り乱してしまいすみませんでした……」

「大丈夫ならいいんだ。そういえば、君の名前聞いてなかったな、名前はなんていうんだ？」

「名乗り忘れていましたっ。えっと私は、プリフィーネ・シュナイダーと申します。皆からフィーネと呼ばれていました、よろしくお願ひします勇者様っ」

「ああ、よろしく。オレの名前は刈谷神時だ。その勇者様ってやめてくれないか？ できれば神時と呼び捨てで呼んでくれ、オレもフィーネって呼ぶからさ」

「は、はいっ。ゆうしゃ…、神時がそう言つのであればっ！」

フィーネは少し頬を染めながら神時の名前を呼んだ。

神時はフィーネの顔を真剣に見た。

「中二病的な話かもしれないが、オレはフィーネの言うことを信じる」

「ほ、本当ですか？ カフェテリアとかもつ言いませんか？」

「ああ、言わない。悪かったな」

「い、いえつ。いいのです。確かにこの世界の人には理解し難い話だったかもしれません」

フィーネは笑顔でそう言った。

「ふう、信じたんだから色々話を聞かせてくれよな？」

「あ、はいっ」

フィーネは元気よく返事をしてくれた。神時はふと勉強机に置いてある目覚まし時計を見てみた。

すると、目覚ましは七時半になっていた。

「うわ、やばいつ。学校遅刻するーっ！」

神時は急いでダンスへ向かい、学校の制服を取り出す。

「ど、どうしたのですか！？ まさか魔物の襲来ですかっ！」

「そんなわけないだろ！ オレは今から学校なんだ」

「この世界にも学校があるのですか？ 私の世界にもありましたよ」

「へー、アフエテリアにも学校つてあるのか」

会話をしているうちに制服の上着を身につける神時。

「はい、たくさんありましたよ！」

フィーネは思い出すかのように語る。

「あ、あの、フィーネ？ ちょっと窓側を見てくれるとありがたいんだが…」

神時は制服のズボンをフィーネに見せる。

「はい？ あ、す、すみませんっ。気が利かなくて」

それを見たフィーネは顔を真っ赤にして、窓の方を向く。

神時はそのうちに制服のズボンを着て、ネクタイを締める。

神時の制服は白と黒を基調にした学生服で、ネクタイと上着は黒、シャツは普通の白色で、ズボンは灰色となっている。

「も、もういいですか？」

「ああ、いいよ」

フィーネはゆっくりとこちらを向くと、突然顔を真っ赤にする。

「え、オレどこかおかしい？ いつもどおりやったんだけど…」

「い、いえ。ちょっとかつこよすぎたもので」

「オレが？　ないない。オレは自慢じゃないがこの16年間彼女は
いないぞ？　悲しいことに……」

「本当ですか？　この世界の女は見る目がありません。神時みた
いな人ほつとくなんて、私なら……、ほつときませんよ……」

「最後の方が聞き取れなかったんだけど、なんて言っただけ？」

「な、なんでもありませんっ」

「？」

神時は頭にハテナマークを浮かべる。

すると、神事は重要な問題を思いついた。

「おいフィーネ！　その防具みたいなやつはこっちでははずしてお
けよ、後、悪いが今日一日この部屋から出ないでくれないか？　母
さんに見つかるとう面倒なことになるから」

「は、はい……」

フィーネは少し落ち込んだが、その後神時が「学校が終わったら
すぐ帰ってくるから」と言うと元気を取り戻した。

フィーネはつけていた防具を外した。

すると、ワイシャツみたいな服に短いスカートという姿になった。

「うゝん、今は秋の終盤だからこれじゃあ寒くないか？」

「い、いえ。大丈夫ですっ。　くちゅんっ」

可愛いくしゃみをするフィーネ。その光景を見かねた神時はタン
スから、出かけるときに着ていく上着を取り出し、フィーネに渡す。
「これで少しぐらひは寒さが凌げれるだろ？　一応暖房をつけてお
くから」

「はい。ありがとうございます神時」

フィーネの笑顔に少し胸が高鳴る神時。

すると、下の階から、

「おーい、お兄ちゃーん。起きてる？　早く行かないと遅刻する
よー！　早く降りてこないと、あたしのゲームソフト貸してあげな

いよー？」

その声を聞いた神時は急いで、本棚の近くにあるカバンを取る。

「今の声は妹さんですか？」

「ああ、オレの妹で美樹って言うんだ。あいつ、オレが起きるのが遅いといつもこの部屋に来るから今すぐ行かないと！」

神時はカバンを右手に持ち、左手でドアノブに手をかける。

「そうですか、それではいつてらっしやい神時」

「お、おう」

ファーネの笑顔に神時の心拍数はまた上昇した。

それから神時は居間のテーブルで軽く食事を済ませ、キッチンに置いてあった食パンと冷蔵庫に入っていたいちごジャムを持って再び2階に行き、フィーネに渡す。

家族に怪しまれないようにするのがとても大変だった神時。

フィーネに食パンとジャムを渡し、それで朝と昼なんとか頼む！
つと言ったところ笑顔ではいつと言ってくれた。

神時は急いで階段を降り玄関に向かう、玄関で靴を履いていると美樹がマフラーを渡してきた。

美樹は神時と同じ高校の1年生で、神時の制服と同じものを着ている。唯一違うのは、灰色のスカートである。

「お兄ちゃん、今日からもっと冷えるらしいから、これ」

そう言っマフラーを手渡す美樹。

「ありがとな、よし！ 靴も履いたし学校行くか」

マフラーを手際よく首に巻くと玄関を開ける。美樹も靴を履く。

神時がドアを開けた瞬間、寒い風が玄関に入ってくる。

「ふう、今日は本当に寒いな。これだと、今日あたり雪が降ったりしてな」

「ふふ、お兄ちゃん。冗談は顔だけにしてよー、雪は今日じゃなく明日からだよ?」

「別に顔は冗談じゃないんだが…、そうか、明日か…。さ、急がないと遅刻だ!」

「ま、待ってよ お兄ちゃんっ」

神時は少し屈伸運動をすると突如走りだし、そしてそれを追うように美樹も走り出した。

神時の心には学校よりもフィーネの心配が渦巻いていたのであった。

第1章　学校の七不思議

神時は妹である美樹と一緒に走りながら、学校へ向かっていた。

「お兄ちゃんっ、何で今日はそんなに急ぐの？」

「オレのクラス今日から文化祭の準備があって、八時まで学校行かなきゃいけないんだよっ」

「八時って…、あともう5分もないよ！」

「だから急いでるんだよっ！　オレのクラス委員長、遅れると百パー殺されるから…」

「確かお兄ちゃんの委員長さんって…、姫城麗華さんだよね？　あの有名財閥の？」

「ああ。麗華はあるゆる方法を使って、自分の決めたルールに逆らった奴を粛清してきやがった。しかもやるのが地味に最悪なんだ…」

「例えば？」

「美樹が嫌がることをピンポイントでやってくるな、絶対。例えばお前の大事にしてるゲームのセーブデータを全て残らず削除とかな」

「あたしから魂を抜くようなものだよっ！　…、そんなこと本当にするの？」

「ああ。1ヶ月前野嶋っていうアニメ大好き少年が、麗華たん萌えっっって言いまくってたら、大切に保存していたアニメ関連グッズDVD　PCが全て壊されていたそうだ」

「それって犯罪じゃ…」

「姫城財閥は警察にも顔が利く、何をやっても無罪だろうな」

「ぬぬぬぬ…」

「でもな？　悪いことをしなければ別に何もやってこないからな」

「でもルールには厳しいんでしょ？」

「そうなんだよ…、くっそー！早く学校行かねーとっ！」

神時はさらにスピードを上げ学校へ急ぐのであった。

時間は、七時五十分。

「はあはあはあ……」

神時はその後、自分の限界を超えなんとか学校に間に合ったのである。

現在神時は息をきらせながら、自分の机に突っ伏していた。神時の席は窓側の一番後ろである。

「おや？ どうしたんだい神時？」

そんな神時に近づく、茶髪の眼鏡の少年。

この少年は高橋誠、神時の小学生時代からの友達で、ずっと同じクラスという奇妙な縁なのだ。

「ん…？」

神時は生気の薄れた顔で誠のことを見つめる。

「お前誰だっけ？」

「おい！ 昨日会ったばかりじゃないか！ 神時、君は馬鹿なのか？ とつても馬鹿なのか？」

机に手を思いつき置き、神事を怒鳴りつける誠。

それに対し神時は、じーっと誠の顔を見る。

「僕の顔に何かついてるのかい？」

「ああ、その眉毛。お前誠かー、まったく前髪で眉毛が見えなくてわからなかったじゃないか」

「僕はそんな特徴的な眉毛はしてないよっ！！もしかして毎回眉毛で僕を確かめたりするのかい？」

「ああ、それがどうかしたのか？」

「神時の眼には人を眉毛で判断するような機能が付いているのか！」
「そんな機能付いてるわけないだろ？ お前は馬鹿か？」

「神時だけには言われたくないよ！ 僕はこれでも学力で学年一位を常にキープしてきたからね」

「まったく全ては眼鏡のおかげだろ？ 何をえらそうに……」

「そんなわけないだろっ！ 神時は本当に馬鹿だな！」

「はいはい、馬鹿で結構！」

「く、何か負けた気がする……」

誠はそのまま自分の席である廊下側のほうへ行く。

神時は誠との口論が終わると再び席に突っ伏した。

（はあ、今日は文化祭の準備か）

神時は突っ伏したまま窓から空を見て、黄昏ている。

（フィーネの奴、本当に大丈夫だろうな……）

パンツ！！

神時が黄昏ていると、突然目の前で大きい音がした。

驚いた神事、目の前の席を見る。

「今日はどうしたの神時？ また一人前に黄昏ちゃって」

神時の目の前で笑う少女。黒髪をツインテールにしており、漆黒のようなきれいな瞳をしている。

この少女は金沢亜美。

神時の高校生時代から友達で二年連続同じクラスでもある。

神時はほっとしたような表情し、頬杖をつき亜美の方を見る。

「お前な、いきなり目の前で手を叩くなよ。ビックリするだろ？」

「ごめんね。神時がてつきり現実逃避してるかと思ってビックリすればこっちに帰ってくるかなって」

「オレはそう簡単に現実逃避はしねーよ。するとすれば、オレが造

った古代模型を壊した時くらいだ」

神時は大の古代建造物好きなのである。

「あははは、そうだったね」

「そうだよ、まったく。そういえば今日は早いな？　いつもは食パンくわえて、寝癖のまま遅刻してくるくせに」

「私は少女マンガのヒロインか！　なんてね、今日は文化祭の準備の日でしょ？　遅刻したら麗華ちゃんに何されるかわかんないから」

「たしかにな」

神時は納得するように腕を組み、うんうんと頷く。

すると亜美が、片手を自分の口によせ、急に声のトーンを低くする。

「そつえば、昨日見たんだって……」

「何をだ？　校長がカツラを隠す瞬間か？」

「え、校長カツラだったの！？　衝撃の真実だね。　じゃなくて！

幽霊だよ！　幽霊」

「幽霊？　うーん、幽霊、といえはうちの町の特産品。『きつと幽霊よりも冷たくなれます！　あなたの家の一食どうぞ！　あまみね』　アイス……」　だな」

「確かにそうだけど、違うの！　幽霊つてのは本物だよ！」

「ふーん」

神時がどうしてもよさそうに鼻を鳴らす。

「実は昨日……図書室で夜遅くまで勉強していた女子生徒がいたんだけど、気が付くともう夜の８時だったんだって。それでね、急いで帰ろうと思った女子生徒が普段は立ち入り禁止の廊下を通ったんだよ。その廊下は昔、一人の女子生徒が錯乱した男子生徒に刺されて出血多量で死んだ場所なんだ。しかも、その錯乱した男子生徒も

1年後同じ場所で自殺したんだって。それ以来、その廊下は使われないように立ち入り禁止になったんだ。でも、急いでいた女子生徒はそこを通ってしまったんだって。ほら、あそこの廊下を使うと下駄箱まですぐ着くでしょ？　そしてね女子生徒は何事もなく廊下を抜けようとしてたんだよ、だけど！　突然肩を掴まれてる感触がしてね、ゆっくりと振り向いたら……………」

「警備員のおじさんだった！　ってオチだろ？」

亜美は深呼吸をゆっくりして、幽霊の話が続けようとするが神時がそれに割り込む。

「違うよーっ！！　血だらけの女子生徒だったんだよっ！！　せつかくいいとこだったのに、邪魔しないでよ！」

亜美は頬を膨らませ、神時を怒った。

「悪い悪い、ついああいう場面になると邪魔したくなるんだよな。でもその話って本当なのか？　それってうちの学校の七不思議のひとつだろ？」

「本当だよーっ」

「ふーん。そういえばうちの学校の七不思議ってどんなやつあったっけ？」

「えーとね。まずさっきの、立ち入らずの廊下でしょ？　あとは、理科室の死霊の呻き声、図書室の本が朝になると順番がめちゃくちゃになってる、本の大移動、校舎の裏にある焼却炉に出る子供の幽霊、午前0時に入ると空間がねじれる、歪む教室、屋上の階段を数えて登ると、屋上に黒い人影がでる、そして最後に、六つ全ての不思議を体験しその年雪が初めて降る日中庭に竜が現れるってのが、この学校の七不思議だね」

「へー、うちの学校そんな七不思議あったんだな。ってあれ？　竜……………」

「ん？　どうかした？」

「あ、いや、なんでもない」

神時は七不思議の竜というものが引つかかっていた。
（帰ったら一応、フィーネに話してみるか）
亜美はいつのまにか前を向いていた。

すると、教室の扉がガラツと音をたてて開き、一人の女子生徒が入ってきた。

きれいな金色の髪をなびかせ、宝石のような碧色の瞳を煌かせていた。

この女子生徒の名は、姫城麗華。

神時達のクラスメイトにして、日本有数の大財閥姫城家のご令嬢である。

「皆さん、集まりがよくてよいですね。それでは早速文化祭の準備に取り掛かりたいと思います」

「……………は、はいっ！！……………」

このとき、クラス皆心は一致し、声が重なり合った。

麗華は黒板の前に立ち、皆へ指示を出す。

「私達のクラスは、執事喫茶をやることになりましたわよね？ それで、姫城家に仕える本物の執事達に、男子生徒の皆様を教育していただくよう頼んでおきましたので、執事をやる男子生徒は今日の放課後、私の家までご足労いただけますでしょうか？」

麗華が丁寧な口調で述べる。

それに対して、執事をやる男子生徒達は、

「……………はいっ！！ よろこんでっ！！……………」

と、息をピッタリに返事をする。

だが、一人その息に合っていない者がいた。

それは、神時である。

神時は先ほど知った七不思議の件を早くフィーネに報告しなければならぬからである。

「悪いがオレは今日用事があるから断わらせてもらっつな。このつ
けは後でちゃんとするから、悪いな、麗華」

教室中がこう思った、「神時、終わった…」と。

断わられた麗華は、こめかみをピクピクツと動かさせていた。

「ど、どうして断わるんですの？ 送迎はリムジンとハイヤーです
のよ？ それでもご不満が？」

「そういうわけではないんだがな、オレ、今日とっても重要な用事
ができちまつたんだ」

「な、なるほど…、重要な用事とは何ですか？」

「深くは言えないんだが、しいて言うなら、大事な人が探している
情報が得られてそれを伝えなければいけないんだ」

（フィーネがどれくらい大事なのかはまだわかんないけど、執事の
練習よりは大事なのは確かだ）

神時の一言にある一部の女子には衝撃がはしつたのは言うまでも
ないことだ。

神時の返答に対して、麗華は頬を朱に染め、大胆な発言をしてし
まう。

「そ、その大事な人とは、私より大事なのですのっ！」

「ん~~~~……」

（フィーネと麗華があゝ。付き合いで言えば麗華だが、親密度で言
えばフィーネ、かな？）

（うゝん、執事の練習は明日からでもできるしな、さっきの情報は
フィーネがアフエテリアに戻る手がかりになる情報だ。フィーネだ
つて一刻も早くアフエテリアに帰りたいはずだからな）

「今は、大事な人（情報）のほうが大事だな」

神時の言葉を聞いた麗華は何か崩れ去るようにその場座った。教室中が、こう思った。「神時の葬式はいつ開かれるのだろうか」と。

そして、一部の女子に再び衝撃がはしったのも言うまでもないことだ。

その後、麗華が力なくその場座ってから数分後先生が来て、あっさりと文化祭の話は終わった。

文化祭は、執事喫茶をやり、神時以外の執事役は麗華の家へ行くことになり。

他の生徒たちは、まず女子は小道具や飾りつけの製作へ。

執事以外の男子生徒は、食材の調達と食器などを集めることになった。

細かいことは放課後決めることになり、朝のホームルームは終わった。

授業は順調に進み、3時限目のとき麗華が保健室より戻ってきた。いつのまにか保健室へ行っていたらしい。

そして現在は4時限目の途中である。4時限目は数学で、神時の退屈な時間である。

神時はボーッと空見て、朝同様黄昏ているのである。

数学の平矢先生はテキパキと数式の説明をしているが、神時はあまり聞いていない。ちなみに平矢先生は女性である。

他の生徒の何人かも神時同様、他のことをしている。

すると、窓側の一番前席の男子生徒が窓を見て、大きな声を出す。この男子生徒はいいやつではあるのだが、少しチャラチャラしてい

るところがあるのだ。

「おおっ!!! 校門にいる女子生徒マジ可愛い!!! しかも
うちの学校制服着てるぜっ!!!」

その声につられて男子生徒はほとんど窓際まで大移動した。
特に誠の速度は並みではなく、超人の域まで達していた。

（こいつどんだけ、美少女、美女好きなんだよ）

神時はあきれ果てた顔で誠を見ていた。
すると、男子生徒が一斉に、

「「「「「か、か、可愛い可愛い可愛い!!!!!!!!!」」」」」
「「「「「

と雄たけびを上げる。特に誠。

女子生徒もちらほらと窓際へ移動する。

平矢先生まで見に行く始末である。

（先生まで行ってどうすんだよっ！）

と思いながら、神時も校門を窓から見る。

全校生徒の男子の大半が今、校門にいる女子生徒に夢中である。
ほとんどの女子も、校門にいる女子生徒を見ていた。

それほどまで、校門にいる女子生徒が可愛いっということだ。

そして、神時は校門を見た瞬間、心臓が止まりそうになった。

校門の前にはフィーネがいたのだ。

あれだけ、部屋から出るなと言ったはずフィーネがだ。
しかも、神時の学校の服を着てだ。

神時の心から最初に出てきた感情は、怒りでも、焦りでもなく、心配だった。

「なんで、あいつが、ここに…」

（フィーネ…）

神時はそう呟くと、急いで人ごみから抜け出し、教室を出た。

そんな神時を、クラスメイト達は、驚きの表情で見つめていたのであつた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7485y/>

学園ドラゴン

2011年11月23日17時54分発行